

テレビドラマ

「しあわせ旅行」

西日本文化サークルシナリオ教室

松田光子

登場人物

- ・ 春子 ㊦才 元看護師 約一年前に退職
- ・ 千代 ㊦才 春子の母 認知症あり
- ・ ルミ ㊦才 看護師長 春子とは同期
- ・ 吉田 ㊦才 見習い看護師
- ・ 入院患者
- ・ ウエイトレス

春子の家

春子、寝ている千代の世話をしている。

春子 お母さん時間だから、ちよつと見まし

ようね。(掛け布団をめくろうとする)

千代 ああつ、さぶつ。(春子の手を払いのけて布団を引き戻す)

春子 もう、お母さんの寒がり！(千代の耳に口をよせて)じゃ、横からね。

春子 なれた手つき。布団をめくらず、腰の横辺りから布団の中へ手を入れる。

春子 あら、お布団濡れてる！もう、いやだ
お母さんつたらまたオムツはずして！

思わず手を振り上げる春子の険しい表情

病院の一室

患者の世話をする吉田。嘔みつかれて飛び下がる。

吉田 痛っ、また嘔みつかれちゃった！（片手を振り上げる）もうっ！

白衣の春子、入室。吉田を見て驚く。

春子（吉田を見て）吉田さんっ！

吉田（振り向いて）え、ああ、大丈夫ですよ。この手は、カッとした自分を叱るため。ほらね！ピタン！あははは。

吉田 振り上げた手で自分の額を叩き、くったくなく笑う

春子の家（もとの場面）

春子 ふふっ（苦笑いして自分の額を叩く）

千代　八重さん、冷たいよー。

春子　はいはい、気持ち悪かったのね、パジヤマも替えなくっちゃあね、待ってて。

千代　八重さん：

春子（千代の耳元に顔をよせて）私は八重さんじゃありません。春子でしょ！

千代　はあ？

春子　（小さな声でぶつぶつと）もう、自分の娘ぐらい忘れないでよ。

喫茶店

窓際のテーブルに春子とルミ。春子の隣、通路側に車椅子の千代。

ルミ　春子、仕事まで辞めちゃって…なかなかか、大変だよね…

春子　そうね、大変と言えば大変かな。職場とはちがって、ナースの仕事だけってじゃなくってひとり何役もだから…

カップにシュガーを入れて千代に持たせる春子。気の毒そうに見守るルミ。

春子 時々キレイちやいな時もあるの、そ

んな時には吉田さんの真似するのよ。

ルミ 吉田さんって、あの看護見習いの？

春子 そう。自分のおでこをピシヤツ！

ルミ で、ハハハハハハハハって？

春子 それぞれ。

ふたり、見合わせて吹き出し笑い

春子 ま、経済的には大変だけど。

ルミ お母様、どっか施設に入はいれたら、春子、

看護師の仕事続けられるんじゃない？

春子 手に負えないって事になったら考える。

： あらあら、はいハンカチ。

千代にハンカチを持たせるもボーっとし

ている。春子、千代の口元を拭く。

千代 おつきに、八重さん。

ルミ え、八重さんて？

春子 叔母のことよ、母の妹。ずっとこう。

千代、口を拭いてもらった後、ルミに会
積。おちよぼ口をしての特上の笑顔。

ルミ あら、どうも…ふふふ、負けちゃうわ

ね、お母様の幸せそうなの笑顔！

春子 でしょう！なんか、子育てといっしょ

かなって思っちゃう。世話しているようで、

実は、私のほうが教えられてる…

ルミ ふーん。

春子（ふざけて）まあ、独身でセレブなルミ

お嬢様には、おわかり頂けないことでゴザ
イマス。

ルミ（ふざけて）ハイハイでゴザイマスウ！

青春時代に戻ったように笑うふたり

ルミ　で、行ける？今度の旅行：

春子　行くわよ、絶対！

ルミ　ああよかった、うれしいな。ね、ね、

知ってる？もう、菜の花真っ盛りって。

春子　わあ、すてきでしょうね。

ルミ　お宿も温泉もグーなんだから。

春子　誘って下さってありがとうございます

たっ、主任にお礼言っというてね。

ルミ　わかった、言っとく。で、お母様はシ

ョートステイに？

春子　そう。担当のケアマネージャーさんに、

たまにはどうぞって、勧められてるし：

ウェイトレス　お水、お足し致します（ピッ

チャーから其々のコップに水を注ぎ足す）

千代　あっあ、い、い、いりません。（自分

のコップに手でふたをする）もう、おいと

ましないと、時間がありませんので。（丁

寧に頭を下げる）

ウエイトレス はあ？ そうですね。失礼しました。(次のテーブルへ)

千代 八重さん、早く行かんと、遅れるよ。

春子 そろそろお母さんのタイムリミットね。

はあい、行きましようね。

ルミ え、どこに行くの？

千代 それは母に聞かないと、ふふふ。

ルミ ん、なによ？ (千代に) お母様、どち

らまでいらっしやるんですか？

千代 し、下関。

ルミ 下関って…

千代 だ、大連行き船は、一日一回だから、

乗り遅れないようにしないと。

ルミ あらあら…

春子、手際よく千代にマフラーや手袋を

させる。ルミ、感心したように見ている。

春子 私のこと、旅行も出来ないうつて思っ

てたでしょう。実は、毎日、母と旅に出て

るのよ。さっ、出ましようか。

ルミ　へえ：あ、私も。（立ち上がる）

街の中

喫茶店を出て、雑踏の中千代の車椅子を
押す春子、並んで歩くルミ。

春子　あるときは小倉に、またあるときは函

館に、時には釜山や北満なんかの海外旅行
まで、三十分もあればOKの日帰り旅行！

ルミ　そっかあ、お母様の思い出の地ね。

春子　しかも、母にとって、いい時代だった

ところだけって感じ。

ルミ　それって、なんか、幸せね。

交差点の横断歩道。間もなく信号が変る

春子　ふふっ。時間も空間もひとつ飛び！い

ってきまーす。（おどけて手を振る）

ルミ（千代に）はい、いつてらっしゃいま
せ。（春子に）じゃ、また電話する。

春子　ありがとう、じゃあね。

千代　お、お構いもしませんで、申し訳ござ
いません。あ、では、さようなら（丁寧に
頭を下げる）

横断歩道を渡ってルミへ手を振る春子。

千代はすでに違う方向を見ている。

車椅子を押しながら、千代の耳元で話し
かける春子。うなずいて微笑む千代。

不思議な光に満たされた二人のバック
に下関や釜山、満州などの美しい風景
が広がる。それは千代の心象風景なの
である。

終

